

# 探討在台灣日語寫作課程中培養批判性讀寫能力之可能性 —以台灣社會現象為題材—

羅曉勤

銘傳大學應用日語學系副教授

## 摘要

筆者為解決存在日文作文課堂中的「沒有讀者」、「缺乏文章構成力」、「誤用無法共享」的問題，而導入同儕回饋，並進行一連串的相關教學研究。但同時身為一位日語教師，筆者也思考透過日語教育我們到底想要培育什麼樣的日語人材；也就是說社會到底須要我們教職人員去培育何種日語人材。透過一連串的檢討筆者得知，社會須要學校去培養 21 世紀的人材，即擁有「獨立、合作、創新」能力之人材。為達到此目標培育具有批判性素養 (critical literacy) 就成為重要的課題，而「課題解決型」教授法則是在培育批判性素養時的重要教學法。本論文為達到培育 21 世紀日語人材的目標，將「課題解決型 (problem-posing)」教授法導入「日語作文 (3)(4)」的課程中；藉此培養對社會現象的關心並藉由自行收集相關資料去進行分析，而找出存在其社會現象的問題點。此論文主要是以台灣社會中的「小確幸」現象為教學主題，進行「課題解決型」教授法的活動設計，透過學習者的成品可以發現藉由「課題解決型」教授法的教學活動，確實可以訓練出擁有「獨立、合作、創新」能力之人材。

關鍵字：課題提起型、批判性素養、日語人材、教學實踐研究

受理日期：2017.08.31

通過日期：2017.10.20

**Fostering critical literacy in writing Japanese as a foreign  
language in Taiwanese classrooms:  
Taiwan's social phenomenon as a subject**

Lo, Hsiao-Chin

Associate Professor, Ming Chuan University, Taiwan

**Abstract**

This paper addresses a common problem in the instruction of essay writing in the context of teaching Taiwanese students Japanese-namely, a lack of peer review. In addressing this problem, one must reflect on the degree of critical literacy in Japanese that one seeks to promote. For example, what does society demand of Taiwanese students' Japanese-language proficiency, and how can educators prepare their students accordingly? Preparing foreign-language students to meet current linguistic demands requires fostering creativity, an independence of mind, and peer interaction-qualities that comprise critical literacy. Furthermore, applying a "problem-posing" teaching approach is key to helping one's students achieve such literacy. Hence, how to introduce specific "problem-posing" methods-described in-depth herein-to classroom instruction of Japanese in the context of essay-writing is the focus of this paper.

Keywords: critical literary, problem-posing, teaching practice research

# 台湾人日本語学習者の批判的リテラシー能力養成の可能性 —社会現象を題材とした大学での作文授業を例に—

羅曉勤

銘伝大学応用日本語学科准教授

## 要旨

筆者は、長年、日本語作文授業に携わっており、「読者不在」「文章構成力の欠如」「推敲での成果を学習者間で十分に共有できない」といった問題を解決すべく、「ピア・レスポンス」を導入した教育実践研究を行ってきた。一方、教師として、日本語作文授業において、「何のために“決めた・決められた”題材について書かせたのか」や「授業を通してどのような日本語人材・能力を育成したいのか」などの点を、自分自身に問いかけるようにもなった。そこで、社会に求められている日本語人材とは何かを検討するようになり、それに見合う日本語人材を育成するためには、クリティカル・リテラシーの養成が重要な課題の一つだと考えた。そこで、このクリティカル・リテラシーの育成を具現化すべく、「日本語作文(3)(4)」に「課題解決型」教授法を導入することを試み、その題材として、台湾において社会現象の一つに挙げられよう、作家・村上春樹氏の造語である「小確幸」を取り上げた。その結果、自分たちを取り巻く社会現象や問題を学習者に意識させ、その社会現象や問題に関する情報を収集、分析することにより、そこに潜んでいる問題点の本質を明らかにした上で、周囲に対して問題を提起したりその解決法を探索したりできる可能性が見いだされたものである。

キーワード：課題提起型教授法、クリティカル・リテラシー、  
日本語人材育成、実践研究

# 台湾人日本語学習者の批判的リテラシー能力養成の可能性 —社会現象を題材とした大学での作文授業を例に—

羅曉勤

銘伝大学応用日本語学科准教授

## 1. はじめに

所属校で日本語作文授業を担当する筆者は、その現場に「授業における読者の不在」「学習者の文章構成力の欠如」「推敲により得られた成果を学習者間で十分に共有できない」などの問題が存在することに気付いた。そして、それを解決すべく、池田玲子・舘岡洋子（2007）が提案した「対等・対話・プロセス・創造・互惠性」の概念を含有するピア・レスポンスを導入し、その効果を検討した。ただ、ピア・レスポンスを導入しつつも、一方で、日本語作文授業において、「何のために“決めた・決められた”題材について書かせたのか」や「授業を通してどのような日本語の能力や人材を育成したいのか」などを、教師としての自分自身に問いかけるようになった。そして、こうした点を踏まえて自らの実践を振り返ると、日本語作文を担当した当初は、所属校によって“定められている・求められている”教育目標や教育効果にさえ十分に関心を支払わなかった自分と、ただひたすらに教科書を探し、授業に臨んでいた自分であったことに気付いたのである。また、そうした自分の授業での取り組みは、文章作成の指導というより、習得した（すべき）語彙や文型を用いた成果物の提出を求めていただけと言ってもよいものであった。そして、こうした状況を省みたとき、筆者は、作文授業を通してどのような日本語人材を育成したいのかを明確にしない限り、一人の教師として自身の実践フィールドで何をどのように教えるべきなのかがはっきり見えてこないと考えるようになったのである。

そこで、筆者は、自身の携わる授業の内容を改善すべく、所属機

関が求めている日本語人材像や、さらには卒業生らの活躍の場となるであろう台湾社会が求めている日本語人材像とは何かを振り返ることで、授業活動の目標、活動内容、評価項目といった一連の教育活動を確立していくことができるのではないかと考えたのである。ではこうした点を踏まえ、以下において、まず、教育機関によって定められた教育目標とはどのようなものか、そして、教師はそれをどうとらえるべきかについて、分析と考察を示す。

### 1.1 所属校の日本語作文授業における教育目標

では、本稿で対象とする実践フィールドである、筆者の所属校での日本語作文授業において目指す教育の効果や目標がどのようなものか、以下に整理したものを表1として示す。

表1 日本語作文(1)(2)(3)(4)の教育効果と教育目標

	日本語作文(1)(2) (対象:2年次生)	日本語作文(3)(4) (対象:3年次)
教育効果	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 作文作成時に必要な文型や文法を身に付けることができる。</li> <li>2. 習得した文型や文法を使い、600字以上の日本語文章を作成することができる。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 習得した文章体の語彙や文型を使い、文章を書くことができる。</li> <li>2. 文章表現をすることができる。</li> <li>3. ロジック的に物事を考えることができる。</li> <li>4. データの収集・まとめ・分析をすることができる。</li> </ol>
教育目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本語の基礎語彙・文型・文法を習得する。</li> <li>2. 習得した日本語の基礎語彙・文型・文法が応用できる。</li> <li>3. 正しい文法で短い文章を書ける。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 文章を書くための語彙・文型・文法を習得する。</li> <li>2. 習得した文章体の語彙や文型を使い文章を書ける。</li> <li>3. 正しい論理、鋭い視点、整った文章構造の日本語によるレポート作成ができる。</li> </ol>

表1から見れば、2年次生を対象とした日本語作文授業「日本語作文(1)(2)」の教育効果や教育目標は、短い文章やレポートといったジャンルの文章を日本語で書く際の、“形”についての指導が強調されている傾向にある一方で、成果物そのものの内容や、学習の効果や目標を達成するためにどう指導するかなどについては、あまり言及されていないことが分かる。

一方、3年次生を対象とした「日本語作文(3)(4)」では、前者と異なり「ロジック的に物事を考える能力」「データを収集・まとめ・分析する能力」といった、言語形式運用能力以外の能力の育成について言及している。そして、主に「日本語作文(3)(4)」を担当する筆者においては、ここで示された「ロジック的に物事を考える能力」「データ収集・まとめ・分析の能力」といった教育目標が、「1.はじめに」で示した「どのような日本語人材を育成したいのか」といった問いに対する答えを見いだすにおいて、大いにヒントを与えてもらったのである。

では、続いて、筆者の所属校で定められた教育目標と社会で求められている日本語人材とが、どのようにかかわりがあるのかを検討してみたい。

## 1.2 台湾社会で求めている日本語人材とは

まず、台湾の社会が、大学教育に対してどのような人材の育成を求めているのかについて考えたいと思う。2013年12月に出版された『教育部人材培育白皮書』によると、高等教育の目標は次世代人材を育成すること、すなわち、グローバル化・情報化が進んでいる現代社会に即する人材育成が重要(p.14)であり、学習者が学んだ専門領域を実社会で応用できる以外にも、就業力、公民力、創造力、ほかの領域との提携力、グローバルモバイル力といった総合的な能力の育成を目標とする(p.52-53)、としている。また、劉孟奇・邱俊榮・胡均立(2006)では、社会が求める就業力について、大学卒業生および企業を対象に、アンケートとグループインタビューによる調査を行った。その結果、社会が重要としている就業力として、多数意見順に「よい仕事の態度」「安定性およびストレス耐性」「表現やコミュニケーション力」「学習意欲と積極性」「専門知識や技術」「協働力」「問題発見・解決の能力」「思考力」「ITリテラシー」「外国語能力」「仕事におけるモラルの認識」となっている、としている。そして、洪瑞斌(2013)は、就業力を Harvey et al.

(2002) や Spencer&Spencer (1993) で取り上げられたコンピテンシーの概念だとし、また、當作靖彦 (2013) や田中博之 (2009) は、「就業力」について、仕事上や就職において、他人と競争できる自分自身が、すでに個人の能力であり、日本の教育現場でも、21世紀を生き抜くための、社会に必要なスキル養成の必要性が叫ばれるようになった、としている。さらに、これに関連して、佐藤洋一・有田弘樹 (2014) は、21世紀を生き抜くために、「自立・協働・創造に向けた力」をはぐくむ必要がある、としている。このように、現代の教育現場では、「自ら課題を発見し解決する力＝自立」「他者と協働するためのコミュニケーション力＝協働」「物事を多様な観点から論理的に思考する力＝創造」の養成に力を入れるべきだという意見が複数あるのである。

また、人材育成について台湾と日本のそれぞれから見ると、いずれも「問題の発見・解決力」「協働力」「コミュニケーション力」「多様な観点からの論理的な思考力」などが求められているという点が一致する。そして、台湾というフィールドで考えれば、筆者が取り扱う台湾における“日本語”教育環境は「外国語力」の育成に該当する。よって、台湾社会で求めている日本語人材とは、日本語を駆使しながら、「問題の発見・解決力」「協働力」「コミュニケーション力」「多様な観点からの論理的な思考力」を持つ人だと言えよう。

次に、上述した要求される能力とその育成といった観点から、筆者所属校の教育目標と照らしてみても、所属校の「ロジック的に物事を考える能力」は「多様な観点での論理的な思考力」に、「データを収集・まとめ・分析する能力」は「問題の発見・解決力」に包括されていると考えられる。ただ、所属校の教育目標は台湾社会が大学教育に求めている日本語人材力の育成より、範囲が狭いと言え、しかも、「協働力」育成については触れていないのである。よって、筆者は、自分が担当する3年次生を対象とした「日本語作文 (3) (4)」の授業目標として、自身の教育実践により次世代に通

じる日本語人材の育成を行う、といったものを掲げることとした。すなわち、日本語学習を通して（日本語学習をしながら）、学習者の「問題の発見・解決力」「協働力」「コミュニケーション力」「多様な観点からの論理的な思考力」の育成を目指すこととしたのである。

## 2. 台湾社会における日本語人材育成の具現化

### —批判的リテラシーの育成：「課題提起型」教授法—

では、次に、1.2「台湾社会で求めている日本語人材とは」で提起した能力を、教育現場でいかに養成するかについて考えたい。佐藤学（2003）は、21世紀の社会が養成する共通教養には再定義されたリテラシー教育が必要だとした上で、そのあり方としてフレイレの「批判的なリテラシー」の必然性を唱えた。そして、竹川慎哉（2010）は、批判的リテラシー、そしてその教育実践法について以下のように定義している。

批判的リテラシー（critical literacy）とはフレイレが提起した「意識化」としてのリテラシーとエニスの批判的思考に基づいて考えられたもので、意識化を促すためのリテラシー教育として、学習によって自己対他者や現実世界との関係性を意識・意味付けし、さらに変革しようとする実践を意味するもので、この教育を具現化していくための「課題提起型（problem-posing）」教授法は、フレイレによって構築された。（p. 29）

なお、上掲の主張で述べられている「課題提起型」教授法とは、具体的な生活状況が映し出された絵や写真などを前にしながら、学習者の生活に密着した言葉を学習するもので、言葉の獲得と現実の批判的認識との同時育成を目指すものである。つまり、自己と社会との結び付きにおいて、学習者の従来認識が変更されていくこと



になるのである。そして、野元弘幸（2002）は、「課題提起型」教授法を第二言語学習に応用しだしたのはNina Wallersterinで、主に移住労働者を対象としたもので、「聞き取り（Listening）：地域が抱える課題をインタビューなどで明らかにする」「対話（Dialogue）：学習者と学習支援者が共同して批判的意識の獲得と行動に向けて話し合う」「行動（Action）：問題解決の具体的な行動」の三つの基本要素から構成され、1990年代に入ると、ジェンダーや階級などの視点を入れた新たな試みも見られたとした上で、これらの成果に基づき、「課題提起型」教授法を念頭においた日本語教育方法として、以下の四つの目標に設定したプログラムを編成した。

- ①意識化：批判的意識（世界を読む力）の形成、課題解決力の獲得と集団作りを進める。主に、話し合いや討論、意見交換を通じて、人間らしく生きる上で直面する問題に目を向け、解決する力を集団的に作り上げていく。
- ②日本語運用能力の習得：日常生活に欠かせない基礎的な会話力・読み書き能力を習得する。
- ③生活情報・基礎知識の習得：日本で働き生活していく上で不可欠の情報や知識を得る。その際に、地域固有の情報や知識が最重要視される。
- ④学習支援者の学習（共に学ぶ）：学習者が抱える課題・地域が抱える課題を知るにとどまらず、学習とともに課題を掘り起こし、共に解決する課題として意識する。

上掲の項目を見れば、「課題提起型」教授法による言語学習においては、従来は目標言語地域への移住者を主な対象として、地域やそこでの労働や生活を中心に扱っている。しかし、筆者が対象とする学習者は外国語として日本語を専攻する者であり、さらに、目標言語環境下におらず、しかも労働を生活の中心するものではない。従って、課題選択に際しては、対象とする学習者の生活状況を具体的に映し出すもので、かつ、その生活に密着しつつ学習する目

標言語において重要で適切なものであることを考慮する必要がある。また、学習支援者との学習、すなわち、共に学ぶという点においても、学習者が抱える課題を知ることや、さらに、学習者が興味を持ちやすいという点も重要である、よって、実践の初段階では、具体的な生活状況に密着している日本語の表象を導入することにした。

そして「課題提起型」教授法における「自己と世界との関係を批判的に読み解く行為」により「問題発見力」の育成をしつつ、共に学ぶという点を「ピア・ラーニング」の導入することで、仲間たちとの話し合い・討論・意見交換を通じて、多様な観点から取り出し・取り出された現象・問題について、集団的に問題解決、あるいは再認識した上で、日本語で再構築していくことを目指した。そして、本稿では、こうした実践フィールドにおいて、学習者が自己を取り巻く社会現象をいかに読み取り、そして、話し合いを通してその世界をいかに再構築していくのかを、学習者の成果物を通して分析・考察し、さらに、その分析と考察を通して、筆者が目指した授業と実践法の有効性や可能性について検討するものである。

### 3. 実践活動について

#### 3.1 課題の選択について

前述のように、本実践は目標言語環境下にはない学習者を対象としたものである。従って、活動のデザインに際しては、具体的な生活状況を映し出すもので、かつ、学習者の生活に密着しつつ目標言語内に存在するものを取り上げたいと考えた。そこで、筆者が思い当たったのは、“小確幸”という言葉である。”小確幸”とは、作家・村上春樹氏のエッセーに登場する造語で、NHKの番組であるくらし解説（2013.10.8）や曾秋桂（2014）にも取り上げられ、台湾での日常生活においても広告や記事で多く見られる、いわゆる流行語である。こうした点を踏まえ、本実践活動では、「課題提起型」教授法が掲げる具体的な生活状況や学習者の生活に密着したテーマとして、台湾において社会現象の一つともなった“小確幸”という言葉を採用し、

現実の批判的認識を日本語で表現しながら、その表現に関する言葉の獲得を授業目標の一つとした。そして「課題提起型」教授法における具体的な生活状況として、村上氏の造語である“小確幸”と学習者を取り巻く社会における“小確幸”とを比較検討させることで、自分の生活に密着している“小確幸”を学習者が再認識できるようにデザインしたのである。こうしてデザインされ、タスクシートにて学習者に示された目標（20141121授業目標）は、おおむね、以下のようなものである。

- ①ある社会現象について、自分なりの理解を把握し、日本語で表現することができる
- ②資料を通して、自分が理解した社会現象を読み返し、日本語で表現することができる

## 3.2 実践の手順および対象

### 3.2.1 実践の手順

まず、2で述べた「課題提起型」教授法の定義に従い、授業での活動を、①社会現象を読み取る、②ある社会現象について自分なりの理解を把握し、話し合いを通して、その社会現象に対する多角的な認識を構築していく、③その後、自分が構築したものと社会現象との相違を把握、同じく話し合いを通して、その相違を構築する、④自分が話し合いを通して再構築した理解や考えの変化を内省し、社会現象に対して自分なりの意見を文章化する—といった流れに定めた後、それに基づき、次の図1に示すようなタスクシートを作成し、そこに、先に示した授業の内容や教育目標を記載した。なお、タスクシートに授業の内容やその目標を記載したのは、授業活動の内容やその目的・目標を教師が学習者に説明する責任があると考えたからである。

そして、上掲の考えに基づいて行う実際のタスク（=実践・活動）は、おおむね、次のようなものである。

\*\*\*\*\*タスクシート\*\*\*\*\*

1. 「小確幸」という言葉を聴いたことがありますか。どこで、社会的にどのように捕らえているか、ちょっと考えてみてください。

2. 皆様は、どんな時、「小確幸」を感じましたか。具体例を2つ教えてください。

3. 台湾の社会で、「小確幸」とは何ですか。  
 (1) どのような現象があるか、調べてみてください。画像及び文章をそれぞれ5つ、グループ内で、手分けしてください。重複してはいけません。

画像	出所(URL)

本文で「小確幸」に関する部分に、線を引いて、そこを取り出してください。

元の文章・記事	本文で「小確幸」に関する部分	自分なりの理解	その理由	出所

4. 元の文章を読んで、もともとの「小確幸」に関する部分を取り出してください。そして、作者が言った「小確幸」の意味を自分なりの理解、と、なぜそう読み取れたかの理由を教えてください。

本文	自分なりの理解	その理由

図 1：タスクシート（抜粋）

- まず、学習者各自に、自分を取り巻く社会現象（小確幸）について考えさせ、その具体例を思い出しながら自分を取り巻く社会現象（小確幸）のイメージし、その内容について、タスクシートの該当部分（項目 1 と 2）に記入させる。
- さらに、それに関連した社会現象（小確幸）と関連性があると考えられる絵・画像・文章などの資料を五つ以上探すことを宿題として課す。なお、その際、事前にグループ分けをした、そのグループ内で資料が重複しないように指示を与えるとともに、各自で収集した資料について、それぞれのタスクシートにリストアップ（タスクシートの項目 3）しつつ、各資料が示す社会現象（小確幸）について自分なりの認識を明確にし、その内容を個別に付箋に記すように指示する。
- 続いて、上記 2) で集められた資料に見られる社会現象や、個々の学習者が考える社会現象の認識などについて、①教室内でのグループ活動にて分析をさせ、その現象の現実と批判的認識とについてグループ内で話し合いをして、各学習者が認識していた社会現象で類似したものを分類化するとともに、②こうした作業を経て各学習者が再構築した認識について、学習者個々に、タスクシ

ートに記入させる。

- 4) 学習者自身を取り巻く社会現象（小確幸）に関連した言葉を獲得すべく、上記 3) で再構築された現象の現実や批判的認識について、①各学習者に対して「台湾における小確幸」をテーマとした作文として日本語で表現するように指示する。その後、②作成した文章を学習者相互で読み合い（ピア・レスポンス）を行い、そこで得た指摘や助言などを踏まえ、最初の作文（成果物）に、その個所を明示する方法で追記・修正をした上で、修正した作文（成果物）を教師に提出させる。なお、こうして提出された作文（成果物）については、教師が評価を行った上で、学習者らに共通する問題点を推敲した上で整理し、その点について後刻に講義を行う。
- 5) さらに、より多くの言葉を獲得し、また、社会現象（小確幸）のより幅広い認識を促すという狙いから“小確幸”という言葉の出どころである村上氏の短編小説を読ませ、そこで学習者が読み取った村上氏の考える“小確幸”の意味をタスクシートの該当部分（項目の 4）に記入した上で、さらにグループでの話し合い活動を行うように指示し、学習者自身が読み取った村上氏の“小確幸”の意味合いを確認・再構築させ、その内容を「村上春樹の小確幸とは」という題で各学習者に作文を書かせる。
- 6) 最後に、話し合いによる学習支援を通して再構築された、台湾社会と村上氏のそれぞれの“小確幸”を比較し、その相違についての自らの考えをタスクシートに記入させ、それを題材としてグループ内で話し合いを行い、再認識した点について、その個所を明示する方法でタスクシートに追記や修正をさせる、そして、こうして完成されたタスクシートの内容に基づき、「村上春樹の小確幸と台湾社会における小確幸の相違について」というテーマで、各学習者に作文を書かせる。

以上が、実践活動の一連の大まかな流れである。つまり、学習者は、この授業活動において、各段階で指示されたタスクシートへの

記入のほか、「台湾における小確幸」「村上春樹の小確幸とは」「村上春樹の小確幸と台湾社会における小確幸の相違について」をテーマとした三つの作文 (=成果物) を書くことになるのである。

なお、上記に示したタスクの流れの 5) の部分において、“小確幸”という言葉が登場する村上氏の短編を読ませたかという点について、補足しておく。前述したように、「批判的リテラシー教育」のポイントは、言葉の読み書きを通して、学習者に自己と社会や世界との関係を認識させた上で、認識した現象を批判的にとらえるということにある。つまり、読み手や観客が異なれば、それぞれが感じ取る内容や認識も異なると考えられるのである。ただ、その言葉の発信者である作者が表現したいと考えたことを無視して、読者が一方的もしくは勝手に解釈することも、できないであろうと考えられ、こうした点について、佐藤公治 (1996) は、以下のように述べている。

読者の個人的な言語活動 (読解・解釈も含めて) はまったく何の制約も受けない読者の自由な読みといったことは存在しないのであり、作品の読みの世界について言えば、与えられたテキストから読者は完全に自由なのではない。(略) 読解から得られたものはテキストの言葉そのものが示しているものではなく、読者の勝手な想像でもない。これらの総合体 (受動的総合) とでも言うものである。(p. 62-63)

つまり、読解活動を受動的、かつ総合的なものだとすれば、そのとらえ方として、上掲の佐藤の主張で言うところでは、イメージであるとしている。これについて、佐藤公治 (1996) は、以下のように、より詳しく述べている。

テキストは、図式の連続で構成されており、常に全体のうちのいくつかの局面を示しているに過ぎない。読者は図式全体を総合し、一つの意味としてみることができるような視点

を取ることが求められる。ある視点からながめ、イメージ化することによって、テキストの全体像が具体的になるのである。(p. 65)

つまり、以上のような佐藤の主張から考えれば、作者が発信したい・伝えたいことを一つの意味として感じるように努めながらそれを読み取れば、受け手による勝手な読みを避けることができるのである。そして、送り手が伝えたい視点を受け手が読み取ることができれば、その内容もイメージすることができ、さらに、それを言語化することも可能となるのである。こうした点を踏まえ、筆者は、学習者たちにテーマの図式全体を適切かつ幅広く読み取らせるべく、“小確幸”が登場する村上氏の作品を読ませたのである。そして、自分にとって意味を持つ視点からテキスト(村上氏の作品)を眺め、学習者自身がイメージ化している“小確幸”はもちろんのこと、村上氏が伝えたい“小確幸”を認識することにより、一つのテーマを多義的に読み取ることが促されると考えたのである。

### 3.2.2 実践の対象

本稿における実践は、筆者が所属する大学において、2014年9月～15年1月に「日本語作文(3)」の授業を履修した日本語を専攻する大学生31人を対象としたものがある。また、対象者の日本語学習歴は平均75週間、大学での日本語授業は1週間平均8～12時間である。

## 4. 調査と分析について

### 4.1 調査対象

本稿の目的は、学習者が自身を取り巻く社会現象を読み取る力の形成に着目し、そのプロセスを明らかにするものである。ただ、紙幅の関係上、実践の各段階で産出された成果物のすべてについて述べることはできない。そのため、本稿では、筆者が行った実践活動のうち、「台湾における小確幸」について、学習者が認識した内容

をグループ活動で分類化した内容と、グループ活動によって再構築した認識を日本語で文章化するという部分の活動について述べるものとする。つまり、ここでの分析対象は、3.2.1「実践の手順」で示したタスクの流れの3)～4)に該当するものである。

## 4.2 分析の対象およびその方法

まず、本稿で分析するのは、上述した調査の対象とする活動において、タスクの流れ3) -②で学習者が書いたタスクシートの該当部分と、同4) -②で作成した日本語で文章である。また、分析に際しては、次世代の人材を育成するために、3の「実践活動について」で述べた「課題提起型」教授法の考えを取り入れた。つまり、「課題提起型」教授法における「自己と世界との関係を批判的に読み解く行為」を「問題発見力」としてとらえ、これを明らかにするために、学習者がどのような世界を読み取ったのかを分析するという考えである。さらに、「ピア・ラーニング」を導入することで、話し合いや討論・意見交換を通じて仲間と共に学ぶということを経験しつつ、集団的な活動を経て多様な観点からの論理的な思考をいかに構築し、「台湾における小確幸」をいかに新たに読み取り、何を問題として反省したのかに着目して考察を行った。

## 5. 分析結果および考察

### 5.1 批判的意識＝世界を読む力の形成

先述のように、本実践では、まず、個々の学習者が台湾社会における“小確幸”に関する資料を集めた後、グループでその資料や学習者個々の認識について話し合い、台湾における“小確幸”という社会現象について分類した。そして、授業では、台湾における“小確幸”としてその現象を取り挙げた動機や、どのように“小確幸”の資料を集め、その分類を行ったのかや、こうした一連の作業からどのような結果を得たかなどについて、学習者各自にその考えを「台湾における小確幸」として文章にまとめさせた。



では、まず、個々の学習者が読み取った「台湾における小確幸」とは、どのようなものであったか、タスクの流れ3) -①でのグループ活動を通して分類されたその結果などを整理したものを、以下に提示する。

表2 形成された批判的意識＝読み取った「小確幸」の世界

生理的・心理的な欲求	睡眠から得た小確幸、欲求を満たす、心理に関するもの、自己満足が得られた、好きなものに関するもの、幸せな感じ、イケメンとの出会い、動物から得たもの、平凡から得たもの、生活から得たもの
意外性	意外なもの、意外にもらったもの、意外に得たもの、予想外のサプライズ、当たり外れに関するもの、なくし物が戻ってきたとき、お金に関するもの
人	付き合いから得たもの、友達から得たもの、ほかの人からもらったもの、親と子どもと一緒に楽しむ幸せ、友達からもらった贈り物、
飲食	飲食から得たもの、食べ物からもらったもの、飲食に関するもの、おいしい食べ物を食べる、
ストレス解消 リラックス	身心のリラックス、心が癒やされる、リラックス、心理に関するもの、時間に関するもの、
レジャー	レジャーや娯楽、旅行から得たもの、休日と旅行に関するもの、風景から得たもの
努力・仕事	仕事に関するもの、努力した後に成功すること、勉強で得たもの
その他	思い出から得たもの、広告から得たもの、小確幸の反面意義、体に関するもの

表2のように、学習者が個々に集めた資料などをグループで話し合った結果、学習者らが認識する台湾における“小確幸”とは、「生理・心理的な欲求」「意外なもの」「人との付き合いを通じたもの」「おいしい物を食べたときに得たもの」「ストレス解消ができたときのもの」「レジャーを通して得たもの」「努力・仕事がほめられたときのもの」「思い出や健康などを通して得たもの」などに分類され、多様なものであることが理解できよう。つまり、学習者は、“小確幸”という言葉を自己の中であらためて意識することを通して、自身の日常生活に存在している社会現象を“発見”(意識化)した上で、グループでの話し合いを通して、その現象に含まれている多様な社

会的意味を“分析”できるようになったと言えるのである。

## 5.2 批判的に読み取った「台湾における小確幸」

では、続いて、自身が意識した社会現象について、グループでの話し合いによって社会的な意味を分析した学習者らが、その読み取った社会的意味をどのように日本語で再構築していくかについて述べる。なお、先にも述べたが、授業におけるこの部分の手続きは、日本語の文章としての最初の成果物である「台湾における小確幸」をテーマとした作文（タスクの流れ4）-①の部分）について、学習者相互で読み合い（ピア・レスポンス）そこでの指摘や助言などの結果を踏まえて先の成果物を修正して教師に提出させる（同4）-②）といったものである。では、以下にピア・レスポンス後に修正した成果物（同4）-②：教師推敲前）を示しながら、その内容について検討したい。なお、提示する成果物内において、**網掛け**はピア・レスポンス後に学習者が追記した部分、下線は学習者が読み取り自分なりに再構築した「台湾における小確幸」の社会的意味や批判的な読みの部分で、いずれも、筆者が補足的に装飾したものである。また、可能な限り原文どおりに表記したため、文章に不正確な部分があることを了承されたい。

### 5.2.1 知足常楽<sup>1</sup>としての“小確幸”

では、まず、学習者が記した成果物のうちから、学習者が“小確幸”を「知足常楽」として読み取った例について見てみよう。

---

<sup>1</sup> 「足るを知る心があれば常に楽しく気持ちも楽になり、常に楽しければ結果として素晴らしい人生を歩んでいける」の意味を持つ中華仏教の言葉。

私は小確幸について、生活で、簡単で意外的で、楽しい、そして、幸せのことだと思う。たとえば、廊下で好きな人を見たり、早い起きて、朝ごはんを食べたり、友達と一緒にのんびり散歩する。これはとても簡単なこと、でも、満足させると思う。台湾では、交通が便利だ、物価も高くない。でも、人間の心は満足したと思いますか？家を買うために、生きるために、終わらない欲望を満足するために、毎日働かなければならぬ。忙しい生活で、たくさん沢山小確幸を見つけて、楽しくで、幸せと思う。これも幸福かもしれない。以上は私の台湾社会における小確幸。

以上のようなまとめから、台湾社会における小確幸とは、いい天気であれば、気持ちもいいものである。余暇さえあれば、リラックスできるものである。好きな人に会ったら、ドキドキしているものである。かわいい動物を見ると心も解けたものである。少しお金がもらっても、喜ぶものである。腹がぺこぺこで、すぐ食べられて、満足に思うものである。体が丈夫になれば、心強くなるものである。ほぼ、周りでよく発生しながらも、自分ならではの幸せである。

以上のようなまとめから、台湾社会における小確幸とは、種類が豊富だ、実は、台湾人にとって、生活の中に、幸福及び楽しさ及び感動など感じを取られる、たとえ小さいことで平凡なことなど、すべて「小確幸」と言っている。それは台湾における小確幸の現象だ。

上に示した成果物に見れば、これらの学習者が読み取った「台湾における小確幸」とは、「種類が豊富で、小さいことだが、平凡で、簡単なこと」と定義されていることが分かる。そして、「人が欲張りをしたら、その欲望を満たすために、毎日忙しく過ごさなければならぬ」と、台湾の一部に見られる生活スタイルについて問いかける姿勢が見られた。

### 5.2.2 意外性による“小確幸”

次に読み取られたのは、「意外性による小確幸」である。では、同様に学習者の成果物を見てみる。

以上のようなまとめから、台湾社会における小確幸とは、普段の生活中、無心的な意外の利益があるようなものである。

上掲の成果物では、“小確幸”を、「日常生活での、無心的で意外に得た利益のようなもの」としている。例えば、宝くじに当たった、台風休み、欲しいものが安価で買えたなど、何らかの利益が外から付与されて得たときのものだと定義しているのである。

### 5.2.3 ストレス解消での“小確幸”

また、別の学習者の成果物から読み取れたのは、「ストレス解消の糸口としての小確幸」である。以下にその成果物を示す。

以上のようなまとめから、台湾社会における小確幸とは、自分で生活の中喜びことが取ったことが多いようである。別の人と一緒にやると、幸せを感じるのは、ちょっとすくないようである。なぜなら、それは仕事や人間関係や授業などからストレスを感じて、自分でリラックスしたいだろう。元気になった後、明日も一日になり、どんなチャレンジも続けるぞ。

この読みでは、“小確幸”は自分の生活に多く存在しており、日常生活でストレスを感じた際に“小確幸”と出合うことで、ストレスが解消でき、次へのチャレンジにつながるものと意識していることが分かる。

### 5.2.4 “大確幸”への追及の忘却

最後に、台湾の“小確幸”への社会的意味をとらえただけではなく、集めたデータにより強い意識が働いたことで、台湾の“小確幸”に潜んでいる問題点を指摘した読みについて述べる。まず、その成果物を以下に示す。

人に感動でき、喜ばせることが小確幸だ。さらに、小確幸の「小」は、文章から見ると、大きなことではなく、小さいなことだ。しかし、小確幸が人に与える満足感は社会人に競争力を減退するかもしれないという憂いがある。私は資料を集めた後、小確幸に深くの意味も社会にあたえる影響もさらに知った。台湾人にとって、プレッシャーがよくうけるので、小確幸は必要なものだと思う。しかし、よく小確幸を求めることは競争力を減退するという影響もあると思う。

上掲の成果物から、この学習者は、まず、“小確幸”を「人を感動させ、喜ばせるもの」と定義した上で、“小確幸”の“小”の部分に意識を働かせ、収集した資料に基づき“小”へ批判的な意見を示し、競争力の減退として再定義したことが分かる。このように、「課題提起型」の活動においては、学習者は、話し合いを通してある事象(=社会現象)を分析・考察するだけでなく、自分なりの「読み世界」を構築、もしくは再構築していくこともできるのである。また、いずれの学習者も、自分なりに読み取った社会現象を、学習の目標言語である「日本語」で表現する力も備えるようになったと考えられ

る。もちろん、上の成果物を見れば、日本語の文章・表現には不正確で未熟な部分も少なくない。だが、その部分こそ、言語を教授する実践者が、教師として教室に存在する一つの役割—日本語文法・日本語による文章表現を指導する—であると考えられる。また、以上の成果物から分かるように、「以上のような～」などの文章表現の型を学習者に事前に提供し、重要な内容や活動を通して認識した自分が表現したいものを、型に当てはめながら書き入れていくことの可能についても見いだすことができた。

## 6. まとめおよび今後の課題

以上のように、作文授業に「課題提起型」教授法を導入することで、自分たちを取り巻く社会現象や問題を学習者に意識させ、さらに、協働作業を通して、その社会現象や問題に関する情報収集・分析することにより、そこに潜んでいる問題点を自ら発見することができたと言えよう。つまり、日本語学習を通して（日本語学習をしながら）、筆者が求めている次世代の人材力である、特に、「問題発見力」「協働力」「コミュニケーション力」「多様な観点から論理的な思考力」を育成することの可能性が見られたと考えられる。しかし、今回の実践活動においては、残念ながら、「問題解決力」の育成といった成果を得ることはできなかった。そのため、今後の諸活動においては、「問題解決力」の育成につながる「課題提起型」教授法を援用した実践として、どのような可能性があるか、模索したいと考える次第である。

付記：本論は、2015年 CAJLE2015 大会において口頭発表を行った内容に、加筆と修正を行ったもので、台湾科学技術部 103 年度の研究補助（MOSOT103-2410-H-130-027-）を得て行うものである。

## 参考文献

NHKくらし解説(2013.10.8)「東アジアで人気 村上春樹の“小確幸”」

<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/169611.html>

池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房, p. 72

佐藤公治（1996）『認知心理学からみた読みの世界—対話と協同的学習をめざして』北大路書房

佐藤学（2003）「リテラシーの概念とその再定義」『教育学研究』第70巻第3号, 日本教育学会, p. 292-301

佐藤洋一・有田弘樹（2014）「随筆教材のテキスト形式を生かす「習得・活用」「批判」—「自立・協働・創造」につながる授業の開発—」『愛知教育大学研究報告：教育科学編』No. 63, 愛知教育大学, p. 163-171

曾秋桂（2014）「「小確幸」の語から見る村上春樹と志賀直哉—『うずまき猫のみつけかた』と『城の崎にて』の描き方に注目して—」『台湾日本語文学報』No. 36, 致良出版社, p. 1-25

竹川慎哉（2010）『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題』明石書房

田中博之（2009）『子どもの総合学力を育てる—学力調査を活かした授業づくりと学校経営』ミネルヴァ書房

當作靖彦（2013）『NIPPON 3.0の処方箋』講談社

野本弘幸（2000）「課題提起型日本語教育の試み—課題提起型日本語学習教材の作成を中心に—」『人文学報：教育学』（35）, 首都大学東京機関リポジトリ, p. 31-54

洪瑞斌（2013）「培養青年之生涯韌力：就業力外的的另一章」『電子報月刊 / 就業安全 半年刊』中華民國 102 年第二期, [http://www2.evta.gov.tw/safe/docs/safe95/userplane/half\\_year\\_display.asp?menu\\_id=3&submenu\\_id=545&ap\\_id=187](http://www2.evta.gov.tw/safe/docs/safe95/userplane/half_year_display.asp?menu_id=3&submenu_id=545&ap_id=187)

5

劉孟奇・邱俊榮・胡均立（2006）『大專畢業生就業力調查報告』青輔會